

第29期社会教育委員の会議

第1回定例会

議事録

令和2年10月30日

【1】開催日時

令和2年10月30日（金）18時30分～20時30分

【2】開催場所

世田谷区役所第2庁舎4階 区議会大会議室

【3】出席委員

坂倉委員（議長）、堀井委員（副議長）、小泉委員、奥平委員、鍵和田委員
村上委員、権田委員、山崎委員、吉岡委員、新海委員

【4】出席職員

教育委員会事務局

林生涯学習部長、田村生涯学習・地域学校連携課長

大井社会教育係長、御園生社会教育担当係長、大沼地域学校連携担当係長

清野社会教育係主任

【5】傍聴人

無し

【6】次第

1 委員の委嘱

2 生涯学習部長あいさつ

3 委員・事務局紹介

4 議事

（1）議長、副議長の選出

（2）議事録署名人の指定

（3）社会教育委員の会議のこれまでの取り組み

（4）第29期社会教育委員の会議の取り組み

（5）意見交換

5 その他

○事務局 ただいまから第29期社会教育委員の会議第1回定例会を開催いたします。

本日、議長が決まるまでの間、進行を務めさせていただきます、私は生涯学習・地域学校連携課長の田村と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、本会議から、会議の正確さを期する上で毎回議事録を作成するため、速記者を同席させていただきますので、御了承願います。

それでは、お手元の議事日程に沿って進めさせていただきます。

初めに、社会教育委員の委嘱を行います。本来ですと、お一人お一人に委嘱状をお渡しするところですが、コロナ禍ということもあり、皆様の席上に委嘱状を置かせていただいております。改めまして、社会教育委員をお引き受けいただき、誠にありがとうございます。

次に、世田谷区教育委員会を代表いたしまして、生涯学習部長の林より御挨拶を申し上げます。

○林部長 4月より現職に着任いたしました生涯学習部長の林でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

皆様には、日頃より、世田谷区及び教育委員会、とりわけ社会教育行政に多大なる御尽力をいただきまして、改めて御礼申し上げます。また、公私にわたりましてご多用のところ、社会教育委員をお引き受けいただきまして、誠にありがとうございます。感謝申し上げます。

さて、社会教育委員の役割でございますが、簡単に申し上げますと、社会教育行政の諸計画の立案、御意見をいただくとともに教育委員会が抱えている課題につきまして調査、研究を行うことになってございます。この第29期社会教育委員の会議につきましては、新型コロナウイルスの影響がございまして第1回の会議が遅くなってしまいましたが、今期につきましては令和2年6月1日から令和4年5月31日までの2年間が任期となっております。本日、10名の委員の方に委嘱させていただきましたが、そのうち5名の方を新たに委員として委嘱してございます。

この後、担当から改めて説明がございしますが、今期のテーマにつきましては「地域と学校でつくる連携・協働のしくみ」について御議論いただきたいと思っております。世田谷区の社会教育行政のため、御尽力賜りますようお願い申し上げます。

教育委員会では、資料にもお配りしましたが、「11+」ということで、今、第2次世田谷区教育ビジョン・第2期行動計画に取り組んでおりますが、これまで小学校、中学校を一

体として捉えた世田谷9年教育の取り組みに加えまして、区立幼稚園・子ども園の幼児教育の2年間を一体としたものとして「11+」ということで取り組んでございます。

これからも皆様の御理解、御協力を賜りたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。簡単でございますが、私からの挨拶とさせていただきます。

○事務局 ありがとうございます。

続きまして、委員・事務局紹介に移ります。お手元の資料1を御覧ください。第29期世田谷区社会教育委員名簿でございます。大変恐れ入りますが、順に自己紹介をしていただきたいと存じます。よろしく願いいたします。

【委員自己紹介】

○事務局 どうもありがとうございます。

それでは次に、事務局を紹介させていただきます。

【事務局自己紹介】

それでは、議事に移ります。

まず、議長、副議長の選出ですが、どなたか立候補、推薦等がございますでしょうか。特にないようでしたら、事務局から議長を坂倉委員に、副議長には堀井委員を御推薦させていただきますと思いますが、皆様いかがでしょうか。（拍手）

（ 異議なし ）

○事務局 ありがとうございます。それでは、御承認をいただきましたので、坂倉委員、堀井委員にお引き受けいただけますでしょうか。よろしく願いいたします。ありがとうございます。

それでは、ただいま御承認いただきました坂倉委員には、議長としてこの後の議事進行をお願いいたします。どうぞよろしく願いいたします。

○議長 必ずしも専門というわけではないのですが、御縁あって3期目ということになりましたので、29期に関しては議長を僭越ながら引き受けさせていただきます。

後ほどテーマとかの議論はあるかと思えますけれども、これまでの4年間は子どもの貧困という非常に重たいテーマで、その中で世田谷区だけではなく社会的に貧困の問題はかなり認知されてきた。そういう意味でいうと、一定の成果はあったんじゃないかと思えます。また、今期からはテーマを一転して新しく皆さんと議論を進めていきたいと思えます。繰り返しになりますけれども、必ずしも社会教育の専門ということではありませんので、どちらかという皆さんの知見、御経験をどんどん伺いながら、みんなで学んでいくとい

うか、課題を我々なりに深めてやっていく形にできればいいなと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

副議長としてぜひ御挨拶いただけますでしょうか。

○副議長 新任ながら副議長をさせていただきます。私は初めてですので、議長を支えて頑張ってもらいたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○議長 よろしくよろしくお願いいたします。

ここから進行させていただきますけれども、まず、本題に入る前に議事日程に従って議事録の署名人の指定を行いたいと思います。毎回、議事録を作成し、次の会議で皆さんにお諮りして御承認いただいたものに署名をいただくという係です。これは持ち回りで進めていく形になると思います。今回は小泉委員と奥平委員にお願いできればと思いますけれども、よろしいでしょうか。ありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。

続いて、議事に入っていきますが、社会教育委員の会議のこれまでの取り組みについて、まず共有していきたいと思いますので、事務局から御説明をお願いいたします。

○事務局 それでは、説明させていただきます。

お手元の資料4の社会教育法（一部抜粋）、資料5の世田谷区社会教育委員の設置に関する条例、資料6の世田谷区社会教育委員の会議規則及び会議傍聴規則、そして、資料8の社会教育委員の会議の活動概要を御参考までに配付させていただきました。

初めに、社会教育法に定められております社会教育委員の会議でございますが、必置制ではなく、法律上は「置くことができる」となっております。東京23区においてはこの会議を設置していない自治体もございます。令和2年3月現在では、世田谷区も含め9区が会議を設置しておりますが、全国的には市町村の統廃合等で設置数は減少しているものと思われま。

それでは、第1回定例会に当たりまして、社会教育委員の会議の概要について説明をさせていただきますので、資料8を御覧ください。

設置の目的でございますが、社会教育委員は、教育委員会の行う社会教育行政に関する諮問機関ということで設けられております。社会教育活動の拡充振興を図るため、広く各界より知識と経験を有する方々の協力を得て社会教育活動を推進しようとする制度で、教育委員会が委嘱させていただいております。

2、根拠規程としては、社会教育法をはじめ以下のものになります。

そして3、社会教育の主な職務ということで全部で4つございます。1つ目が、社会教

育に関する諸計画を立案していただく。2つ目には、定時または臨時に会議を開き、教育委員会の諮問に応じて意見を述べていただきます。3つ目に、社会教育に関する研究調査をしていただくということ。4つ目には、社会教育関係団体に対する補助金に関して意見を述べるという形になっています。この4つ目は、第29期の会議が、当初は6月に開催予定だったんですが、コロナ禍ということで第1回の開催が未定ということもありましたので、この意見に関しては前期の第28期の皆様に書面を通して意見をいただいたところでございます。これは毎年行っておりますので、1期2年の後期、来年度はまた皆様に社会教育関係団体に対する補助金に関して意見を述べていただきます。

4、社会教育委員の構成は、委員の定数は10人以内ということで現在10人の方をお願いさせていただいています。任期は2年になります。

5、令和2年度の活動スケジュールということで、今期に関してはおおむね全9回程度を予定してございます。こちらのスケジュールも含めて本定例会、あるいは次回の定例会等々で具体的にスケジュールを決めていただければと思っています。この定例会は18時半から2時間程度と考えてございます。

6、過去直近のテーマということで、25期から28期のものを記載させていただきました。

それでは改めて、これまでの取り組みについて説明をさせていただきます。世田谷区では、昭和39年から社会教育行政に関する諮問期間として設置しております。お手元にご覧いただけます参考資料の令和2年度版事業概要教育あらし「せたがや」の57ページを御覧いただければと思います。

57ページには、社会教育委員の会議の詳細が記載してあります。この会議を設置いたしました当初は、教育委員会からの諮問に対する答申、または建議をお願いしておりました。近年では、議論の取りまとめと整理といたしまして記録を取るとともに、教育委員会の事業において参考にさせていただいております。平成17年で一旦記載が終わっており、翌18年からは教育委員会の様々な事業への御意見をいただいておりますが、建議、答申という形で御報告いただくことはしておりませんでした。

それでは、直近の会議の概要について御説明をさせていただきます。記載にございます平成30年4月の報告「子どもの貧困をめぐって」では、平成28年、29年度の第27期といたしまして、子どもの貧困をめぐって、単に経済支援や学習支援だけでは解消できない視点といたしまして、社会教育的アプローチから社会との関係性や参加をキーワードとした関係性の貧困に焦点を当て、問題を浮き彫りにしていただきました。令和2年の報告「関係

性の貧困からの脱却に向けた方向性と方策の具現化」では、平成30年度、令和元年度の第28期といたしまして、「子どもの現代的貧困の解決に向けた社会教育施策の提言」といたしまして、「第三の大人・若者の発掘とネットワークづくりに向けた仕組みづくり」を、お手元にあります活動報告書として取りまとめていただきました。こちらの報告書は、教育委員会へ報告させていただくとともに、関係所管への事業実施の際に参考とさせていただくように配付してございます。

簡単ではございますが、以上でございます。

○議長 ありがとうございます。ここまでの説明で何か御質問などはありますか。

なければ、次の議題に移りたいと思います。

ここからは、今期、第29期の社会教育委員の会議の取り組みについてです。続いて、今期の議論の内容などについて再び事務局から御説明をお願いいたします。

○事務局 それでは引き続き、第29期社会教育委員の取り組みについて説明させていただきます。

資料2を御覧ください。A3判のものです。

まず、テーマの方向性でございますが、今期は、「地域と学校でつくる連携・協働のしくみ」とさせていただきます。

諮問・理由といたしましては、教育委員会では、第2次世田谷区教育ビジョンの基本的な考え方に基きまして、「一人ひとりの多様な個性・能力を伸ばし、社会をたくましく生き抜く力を、学校・家庭・地域が連携してはぐくむ」を推進しております。また、これまでの世田谷9年教育は、義務教育の9年間を一体として捉え、その取り組みを継承しながら、キャリア教育を柱といたしまして、区立幼稚園の2年間、小中学校の9年間を合わせた11年を基に、乳幼児から大人までの成長や地域社会との関わりをプラスした教育の仕組みをせたがや「11+」といたしまして、令和2年度より開始してございます。その中の3本柱の一つであります教育の質の転換では、「プラス3」に、社会に開かれた教育活動の推進、地域や保護者と連携した教育の拡充が位置づけられています。詳細は、参考資料、「せたがや11+」のパンフレットを御覧いただきたいと思います。

現在、区内におきまして地域と学校の連携・協働の仕組みといたしましては、地域運営学校や学校支援地域本部の他に総合型地域スポーツクラブ、子どもぶんか村、これは端的に申し上げますと、総合型スポーツクラブの文化クラブ版とお考えいただければと思います。そして、「おやまちプロジェクト」など世田谷区においては様々な形態がございます。

「おやまちプロジェクト」は、尾山台付近の住民、学校、商店、大学など様々な人たちが垣根を越えて集まるチームでありまして、これまで少し遠かったみんなをつないで一緒に学んで考える場所として、地域と学校が連携・協働しながら多種多様な活動をしているプロジェクトでございます。ただいま連携・協働の仕組みを幾つか御紹介させていただいたところなんです、中でも、この「おやまちプロジェクト」は、発足してから僅か2年で一般社団法人格を取得されるなど、現在も精力的に活動されております。これらのことを踏まえまして、第29期の会議では、地域と学校でつくる連携・協働の仕組みの実現に向け、この「おやまちプロジェクト」をモデルに連携・協働する背景や成果と課題等を検証いただき、新たなプロジェクトとなる仕組みについて諮問させていただきたいと考えてございます。

以下、資料に関しては区の動向等を記載してございますが、世田谷区教育委員会では平成17年3月に10年間の教育の方向性を示した教育ビジョンを作成しておりますが、現在、第2次教育ビジョン・第2期行動計画の中でも一貫して学校、地域、家庭の連携を継承しながら進めております。

少し長くなりましたが、もう少し「おやまちプロジェクト」をモデルにさせていただきました理由を申し上げますと、資料2の右側、真ん中のあたりに地域と学校の関係を記載させていただいておりますので、御覧いただきたいと思います。地域に開かれた学校は随分前から言われているんですが、学校、家庭、地域の連携の必要性が求められまして、教育委員会としても、その一環として、学校を地域で支える仕組みとして学校協議会、地域運営学校などがございます。学校と地域の関係を矢印で表すと、現状では地域から学校へという矢印になると思います。しかし、地域連携・協働と言いつつも地域を支える仕組みはというと、学校の働き方改革から考えますと現状ではなかなか難しいのではないかと思います。理想的な関係で申し上げますと、どちらが上とか下という関係ではなく双方向に矢印があるパートナーシップの関係で連携・協働することがこれから特に求められるのではないかと考えております。

したがって、大きな矢印の下の方でございますけれども、学校と地域がパートナーとして連携・協働している「おやまちプロジェクト」は、やりたいと思った人がその思いをプロジェクトにすることができるという自発的な取り組みでありまして、まさに他人事ではなく当事者意識を持って、お互いの貸し借りがない関係の中で共通目標を共有しながらパートナーシップを築いておりますので、おのずと信頼される地域、学校となるばかりで

なく、様々なプロジェクトを通して多世代交流が育まれると同時に、顔の見える関係に繋がることから、結果として安心安全な学校も含めた地域になるというモデルに大変ふさわしい取り組みであると認識しております。

大変長くなりましたが、改めまして、「おやまちプロジェクト」をモデルに調査、研究していただき、地域と学校でつくる連携・協働の仕組みについて御検討いただきますようお願い申し上げます。以上でございます。

○議長 ありがとうございます。この後、それについてどうやって進めていくかを議論していこうと思うんですけれども、まず、その前にテーマ設定そのものについて御質問などがあれば、この段階で少し御質問いただければと思います。いかがですか。

この「おやまちプロジェクト」は私も関わっているのですが、議長としてそれを扱うのは非常にやりづらいところもなくはないんですけれども、私がこれをやろうと言ったわけでももちろんなくて、事務局の方でテーマ設定をしていただいたという経緯です。その意図とか、狙いとか確認しておきたいことがあればぜひお願いできればと思いますが、いかがですか。

その前に、「それは何？」みたいなこともあろうかと思います。もし今すぐに質問しづらいということであれば、議事を進めてプロジェクトの内容が少し見えてきた段階で、改めてテーマ設定についての議論をしてもいいかなと思いますけれども、そんな感じで少し進めさせていただいてもよろしいでしょうか。

そうしたら、この後の議事としてはテーマの方向性や今後の会議予定についての意見交換になっております。

では、今期のテーマをどういう風に進めていくかについて議論したいと思います。いかがでしょうか。

○委員 1つ質問をいいですか。「おやまちプロジェクト」ですが、総合型地域スポーツ・文化クラブというのがあります。たしか尾山台地域にも森と緑の云々という総合型地域スポーツ・文化クラブがあったと記憶しております。スポーツの部分が入っていますけれども、多分、コンセプトはそんなに変わらないんじゃないかなと思います。それとの関連はどうなっていますか。

○議長 私は存じ上げないですけれども、尾山台小学校で総合型地域スポーツ・文化クラブの取り組みがあるという……。

○委員 森と緑の云々というのが、たしかあったような気がするんですが。

○議長 どなたか御存じの方はいらっしゃいますか。

○委員 ということは、あまり「おやまちプロジェクト」とは関連していないということですね。

○議長 そうですね。事務局の方、補足をお願いできますか。

○事務局 現在、区内には総合型地域スポーツ・文化クラブが、いわゆる学び舎単位で構成されておるんですけども、8か所ございまして、その中に尾山台小学校を中心とした翠と溪のスポーツ・文化クラブというのがあります。当然、その中で自主的に皆さんでその学校を使ってスポーツや文化活動をしていますので、「おやまちプロジェクト」とは直接な関係性は私たちの方では確認は取れていないところでございます。以上です。

○委員 分かりました。ありがとうございます。

○議長 学校を中心としてつくられている活動と学校も含めて地域で起こっている活動という意味で、活動内容については似ているところもあると思うんですけども、成り立ちが違うという点が、恐らくあると思うんです。その辺を少し整理したり、ちゃんと見極めていくというのがこの会議の重要なポイントかと思います。逆に言うと、翠と溪のスポーツ・文化クラブの調査とかヒアリングも、もし皆さんの御意向があれば、そちらも聞いてみるというのはあるのではないかと思います。ですから、同地域で主体の違う形の取り組みが学校の外も含めて広がっていることを見てくるという意味では、すごく重要な御指摘なんじゃないかなと思います。ありがとうございます。

「おやまちプロジェクト」に関しては、プロジェクトそのものの資料はないんですけども、手元に2019年度活動報告書があります。これは都市大のものではなくて、私の研究会の学生が作った1年間の活動のまとめで、学生がやっていた活動の紹介が幾つかある中の12ページから世田谷プロジェクトと書いてあります。世田谷を舞台にいろいろやるということで、「おやまちプロジェクト」の中の一部の取り組みを学生主導でやっていることがあります。ぱらぱら見ていただくと、何となく雰囲気分かるかと思います。

この資料は学生の活動が軸になっているので、これ以外に小学校の教室を起点にして地域のお父さん、お母さんとかお年寄り、もちろん子ども、大学生も参加してまちのことを調べて考えるワークショップを年1回行っていたりとか、それ以外にも、住んでいる人は多いんですけども、家から職場、あるいは学校を行き帰りしているだけで、知らない人と繋がる機会は意外とない。お店もいっぱいあるんですけども、物の売り買いという関係になってしまうと、店主と仲よくなるチャンスはあまりなかったり、結構5分違いでみ

んながすれ違い続けているというまちの状況の中に、ちょっとした歩行者天国の滞留とか、月1回、ワイン屋さんでバーを開くことによって、実は家の近所にすごく話の合う人が住んでいて、気が合って何か活動を始めるとか、大学生がやっている歩行者天国のプロジェクトが放課後の子どもの居場所になっていたりとか、そんなことが起きているのが「おやまちプロジェクト」の特徴です。

もう一言だけ言うと、始まったところが結構、この後の皆さんとの議論のヒントになるんじゃないかと思うんですけども、元々これは学校や商店街がやり始めたわけでもなくて、最初の最初、私が都市大に着任して商店街の高野雄太さんという洋品店の三代目の店主が、尾山台のまちは今は賑わっているんだけど、この先、どんどんチェーン店化が進んでいくし、子どもたちも少なくなっていく、これで大丈夫なんだろうかということいろいろ思い悩んでいたんだけど、まちには大学があるということに改めて気がついて、大学と何かできないかということで訪ねてきてくださったのが出発点なんです。

よく大学とまちの連携は、商店街の店を手伝うとかイベントを一緒にやるみたいなことはどこでもやっているんですけども、大学生が商店街の既にやっていることに参加して、それで終わり。要は、実績としては1行書けるけれども、それで何か新しいことが起こるわけではない。それをやってもしょうがないよねということで少し議論をした中で、尾山台の特徴としては、365日、夕方4時から6時まで商店街は歩行者天国になるんです。雄太さんに聞くと、彼が小さかった頃はホコ天の時間こそ子どもが遊んでいたと。今は、ホコ天の時間は自転車とかが行き来して、路上にたたずんで井戸端会議とか、子どももそこを遊んでいい場所だと誰も思っていないので遊ぶこともしない。それはちょっと寂しいよねみたいなことを聞いているうちに、その時間ゼミをやってみようという本当に小さなアクションを起こすところから始めて、大学生もそれをやると、毎日行ったり来たりしている商店街で路上にたたずんで1時間とか座っているみたいな体験は、まちを全然違う角度で体験する。そこで毎週のように活動していると、自然に小学生のお友達がどんどんできていって、毎週来る子が出てきて、小学生同士が仲良くなって、尾山台小の子と私立に通っていて地方から引っ越してきたばかりで全く友達がいなくて仲良くなって、水曜日にいつも遊ぶようになるということがどんどん起こって、大学生にとってもまちが自分の暮らしの現場になってくるし、何か小さいきっかけがいろんな関係性を変えることに繋がる。

重要なことを忘れていました。高野さんと私が出会って何かやっているときに、当時、尾山台小学校の校長先生が、その活動が面白いから一緒にやろうということで、尾山台小

学校の校長室に呼び出されるということがあって、2人で行って、何か面白そうなことをやっていて、尾山台小とキャリア教育をやって、地域の人に子どもたちを育ててもらわないといけないと思っているので、何か一緒にできませんかという話がありました。もう一人、慶應の先生、当時おやじの会をやっている、近所に住んでいる先生がいたので、その4人が集まって、このメンバーで何か始められそうだねとスタートしたのがきっかけでした。重要なのは、教育関係の人と、地域の商業、商店街の理事をされている方と、地域で子育てをしている方と、地域の大学に勤めている私がお会いすることで、非常に横断的なネットワークが多分最初に起きたんだと思うんです。ある意味特殊なケースではあるかもしれないんですけども、その要素をちゃんと読み解いていくことによって、現状、連携したいと言っているけど起こらない理由は何か、そこをヒントに見つかるのではないかとことは考えられるんじゃないかと思っています。

皆さんに御相談の最初の一つとしては、そんなことを言われても「おやまちプロジェクト」って何？という話もあるかと思っていますので、ぜひ、みんなで勉強するというか教えてもらうことは最初のほうでやったほうがいいかなとは思っています。多分現場に行ったほうが分かりやすいと思うので、よかったら、この会議自体がフィールドワークみたいな形で外に出て、ホコ天の時間でもいいですし、リーダーをやっている高野さんにお話を聞く時間を取ってもらったりとか、そんなことで最初進めていけるといいのではないかなと思っています。

そのような前提で、時間は最大8時半に終わればいいそうなので、初回ですから少し自由に議論の時間が取れるといいのかなと思っています。

今のところで何か御質問とか、こんな風にしていくといいんじゃないかみたいなことがありましたら、ぜひお願いできますか。いかがですか。

○副議長 伺っていて非常に興味深いので、「おやまちプロジェクト」についてまず基本的な情報を収集していくのがこの会の第一になるのかなと思います。フィールドワークを次回以降行うというのは非常に有意義かなと思います。

特に私が興味深かったのは、商店街の理事の方から発意があった、このまちをどうにかしていきたい、非常にそこは重要かなと思うんです。多分、どこのまち、商店街にもきっとそういう思いの方がいるんですけども、なかなか繋がれないという部分があると思うので。高野さんが先生の研究室を訪れたわけですね。その一歩は結構勇気あることだと思うんです。危機感がやっぱりあったんだと思うんです。私としては極めて興味深いの

で、ぜひ話を伺ってみたいです。

○委員 「おやまちプロジェクト」は、僕も今日初めて聞いて、成功した例みたいなんですけれども、他にもいろんな違ったパターンで成功している例があるので、例えば、そういう地域融合は主導するのが商店街だったり、町会だったり、はたまたおやじの会だったり、いろんなパターンがあると思うので、少しパターン別に代表例を持ってきてちょっと比較してもらって頭が整理できるんじゃないかなと。1個だけだと、我々も視点が偏っちゃうので、もう少し世田谷全体で情報を集めてもらって、違ったパターンも見ていきたいと思うんですけれども、いかがでしょうか。

○議長 ぜひ。1事例の研究は難しいですし、偏っちゃう可能性もありますので、世田谷で現在どのような連携が行われているのか、昔ながらのというものもあるかもしれませんし、多分、すごくオリジナリティーのある先駆的な、先端的な例は他にもあるんだと思うんです。だから、それを幾つかちゃんと見ていくのはすごく大事だなと思います。皆さんも御存じのものがあれば、ぜひ教えていただければ出して。

○事務局 改めて資料1の名簿を見ていただきたいんですが、こちらにいらっしゃいます10名の方でも、例えば、学校現場の方、社会教育関係者、家庭教育の向上に資する活動を行う者、あるいは学識経験者と4つのカテゴリー分けにさせていただいているんですが、それぞれ多分意識はされていないかもしれないんですが、御自分の活動も含めて地域と学校で連携しているものは、実はあるのではないかなと思うんです。例えば、世田谷はぐくみプロジェクト、先ほども中学校を借りながら料理を作ったりという活動も、まさに地域と学校の連携・協働の仕組みの一つにも当たるかなと思います。あるいは、先ほどもありましたけれども、地域の子どもたちの活動ですとか、あるいは現役の皆さんでも青少年委員の立場からの地域と学校の連携、また、別の肩書ですけれども、学校運営委員ですとか学校支援地域本部、あるいはBOPといった形で、いろいろ挙げていくと学校と地域が連携・協働しているような取り組みを皆さんそれぞれ御経験されているのではないかなと。ぜひそういうところは御自分の現在の活動、あるいは過去のことも含めて、委員の皆さんから発表していただくのも一つあるのかなと。そこで足りないものは改めて事務局からも提案させていただければと考えていますが、いかがでしょうか。

○議長 ぜひ。皆さん、どうですか。事務局の方が調べてくるものだけを議論するだけじゃなくて、皆さんが御存じのものとかがあればぜひ紹介していただいたりして、最初二、三回は現在起こっている事例をみんなでちゃんと理解していくのも重要なかなと思います。

○事務局 なかなかこういう機会でない、それぞれの活動はどういうことをされているかということ共有する機会もありませんので、ぜひ御自身の活動を基に発表していただければと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

○議長 それに関して私の感覚なんですけれども、連携とか協働という言葉がすぐ使われるんですけれども、連携と書いても連携が起こるわけではなくて、しようと言ってできるものでもなくて、結果的に連携とか協働という状態になるメカニズムが多分必要なんです。元々学校を地域に開こうみたいことはずっと前から言っているだけけれども、結局、ごく一部の成功例以外は、どこの学校も開いているかというやっぱりそんなこともなくて、そんな簡単じゃないよねみたいなことがあります。理想は地域とともにある学校みたいな、どちらかがどちらのためということではなくて、「おやまち」だと大きく言うと小学校と商店街なんですけれども、商店街も実は同じ力学があって、商店街を活性化させようさせようすると誰も近寄ってこないというのがあるんです。商店街のために一般の人を引きずり込むとか、小学校と連携するみたいになると、「それは連携ではない、利用ですよね」みたいになって、教育分野でもそういう構造があるわけです。教育のためにと引っ張ってこようすればするほどみんなが入ってこないみたいなことがあって、そこが結構ポイントで、地域とともにあるということがどうやったら実現できるのか、あるいは実現できる事例は何がそうになっているのかをちゃんと見ていくことはすごく大事なかなと思います。

○委員 ちょっと視点がずれるのですが、京王線の下高井戸を高架化しようという計画があって、それに伴って明日のしもたかというプロジェクトが下高井戸商店街で立ち上がっていて、ちょうど今日、明日で、1回みんなが地域の人たちが集まって話し合いをして、その発表があったんです。世田谷区の方が入ってまとめながら、商店街の人も自分事だし、また、地域の人たちもそれによって便利になる、住みやすい地域を考えながら、というような会が今設けられています。

下高井戸には日大の文理学部や松原高校があったり、商店街の中には松沢小学校があり、ちょっと行くと中学校がありという、本当に学校もたくさん集まっているところで、商店街を通って行くようなこともあるのです。まさに今リアルに動いているプロジェクトがあるので、商店街の重鎮の方も、若い人もすごく熱心に取り組んでいますし、こういう風にしたいたいというのもあるので、そういうちょうどエネルギーが上がっているところにうまく乗っていくのもいいんだろうなと思っていたり。

○議長 そのプロジェクトは学校も関わっているんですか。

○委員 小学校のランチルームを借りて話し合いをということなので、先生がいらっしやっ
たかは分からないんですけども、関わってもらっているという、場としてというのかも
しれないんですけども。そういうふうに地域地域でいろいろな課題とか、今起こってい
る現象について取り組んでいくというときもある意味連携というか、先生がさっきおっし
やったような、発意が湧いてくる、誰かのためじゃなく自分がやりたいことを実現する
というタイミングなのかなとちょっと思っています。

○議長 理想的とか言っちゃうとなかなか無理なんですけれども、細かく見ていくと、
協力し合って実現しているものが結構そこかしこに実はある。それをちゃんと評価する
とか、もうちょっとバージョンアップしたら何ができるか見ていくのもすごく大事な
んだろうなと思います。なるほどありがとうございます。

○委員 このテーマの、地域と学校の連携・協働という意味では、確かにいろんな形
態があるんです。「おやまちプロジェクト」はベースが商店街だということで、私は総合
型地域スポーツクラブに関係したものですから、総合型地域スポーツクラブは地域と学
校でつくる協働なんです。ターゲットは地域活性化、地域が学校応援団となるという
ところで、ベースは学校なんです。ベースが違うんですけども、ターゲットは多分同
じじゃないかなと思います。

この図を見せてもらおうと、こういうことを実際にプロジェクトでやる場合には、必
ずそこにコアになる人がいるんです。商店街の高野さん、小学校の先生、大学の先生、
地域の人ということで必ずコアになる人が必要だと。コアになる人がどうするかによ
ってかなりいろんな動きが違って来るかなというのがある。一般論としては多分成
り立つのかなと思います。物事をやるためには人、物、金とよく言いますが、人と物、
この場合には施設なんですか。お金はいろんな意味で必要かどうかはまた別にして、
そういう風なことでいろんな形態があります。「おやまちプロジェクト」は私も初め
てで勉強してないので、これをベースにしていろんな形態を考えていって最大公約
数をつくるという意味では、非常に有効じゃないかということでテーマ設定には賛
同します。

1つ、毎日1時から9時まで「おやまちベース」に必ずいらっしやるんですか。

○議長 その記事は、去年の1月末から3月末の2か月間だけ商店街の空き店舗を
借りて実験的にオープンするというのをやっていたんです。それが「おやまちベ
ース」という活動で、そのときはほぼ60日中55日ぐらい学生が毎日そこ
にいて、誰が来てもウェルカムな場所をというのをやっていました。

○委員 今は。

○議長 今はそこは閉じて、ちょっと別な形で、ちょうど今週から大学が1年間、地域のリビングラボをつくっていく準備室としてもう一回借りて、もうちょっと学生のたまり場というか小学生の居場所みたいな、大学の研究室がまちなかにできていくみたいな雰囲気ですけれども、もう1回プロジェクトが動き始めています。

○委員 今はアトランダムに訪問してというわけには、今のところは行ってもあまり……。

○議長 今はまだ本当に掃除をしている段階なので、開いていたりいなかったりです。いらっしゃるのであれば水曜日の夕方は、大体毎週学生が何かをやっているのです、もしお近くを通りかかるときがあればのぞいてみていただけるといいかもしれません。結構子どもも遊びに来ているので。

○委員 夕方というと何時ぐらい……。

○議長 4時－6時です。

○委員 機会があれば。

○議長 ぜひ。

○委員 今お話しいただいたのは、下高井戸とか尾山台の商店街があるところだと思うんです。烏山も商店街があるんですけれども、烏山小学校のある学区域内には商店街がないんです。なので、今御紹介いただいたような内容の取り組みはちょっと難しいかと思うんですけれども、例えば、地域と学校ということで、ここ数年、今までうちの学校は夏休みのラジオ体操をやっていなかったんですが、今の校長先生が校庭を使っていいですよと言ってくだったので、私のほうで世田谷区ラジオ体操連盟にお願いして、講師の先生を派遣していただいて、そこに地域の方もどうぞということで近所の方が何名か夏休みにお見えになって、大きなプロジェクトはないですけれども、そんな形の関わり方が今できている部分もあるかなと。

あとは、3年生のまちの教育、まちを知ろうというところでは卒業生の話であったりとか、近くの神社のお祭りについて知ろうというときに、知り合いの町会長さんにお電話して、その神社でお祭りをやっている方を御紹介いただいてそういう方が講師になって、この間もおみこしとか獅子舞を持って体育館で3年生の授業が行われたというところで学校と地域が連携して教育活動ができるかなという、細々ですけれどもそんな活動をしています。

○議長 確かに、やっていないですかと言うと、やっていますよね。そういうレベルで、

本当に近隣の地元の付き合いの中で自然に、協力関係というのはあります。そういうことも共通の認識としてちゃんと持っているのは結構大事で、必ずしも全く断絶しているわけではなくて、それとなく知っていて、いざとなったら協力できる体制は多くの地域にちゃんと根差しているんだと思います。ありがとうございます。

○委員 私が青少年委員で担当している下北沢小学校なんですが、地域が古い住宅街で高い建物も建たないところなので、子どもの数が将来的に見ると減っていくということで、そもそも小さな学校が2つと中規模の小学校が1つあったところを、この3つを統合して1つの小学校にしたところなんです。今、開校5年目の学校なんですけれども、新しくなったせいなのか、名前のせいなのか3校分以上の子どもがいつの間にか集まって、今700人近くになって大きな学校になりました。子どもたちは年々入ってきて、卒業して行って入れ替わっていくんですが、地域の方は地元に残られる方が多いので、自分の卒業した学校がなくなるのは寂しいけれども、自分は地域にいるからこの新しい学校の子どもたちを見守ろうということで、地域の見守りですとか、登下校のときの声かけをすごくやってくださっています。地域としては、さっき申し上げたように住宅街なので、下北沢の商店街は割と外から遊びに来られる方が多いので、商店街とタッグを組んでというのもなくはないんですけれども、先生のところみたいに大学が近くにあるわけではなく、「おやまちプロジェクト」のような形の連携は難しいかもしれないんです。けれども、すごく温かい地域の方がたくさんいらっしゃるということでは、学校と地域の連携は取れているのかなと思います。

○議長 ありがとうございます。なるほど。必ずしも商店街がどのまちにもあるわけではないですから、地域側のキーパーソンがどこにいるのかというのが、学校側からは必ずしも見えやすいわけではないですね。

○委員 小学校におやじの会というものもあるんですけれども、平日の日中はお仕事で外に出ていかれる方が多いので、学校をやっている時間帯に地域に残っている方でというのは、やっぱり話合いにしても何にしても難しいんじゃないかと思います。

○議長 ありがとうございます。

○委員 私が中学校でユースキッチン、子どもと一緒に作って食べるというのをやろうと思ったときに、子ども食堂は別でやっていていろいろな課題を感じて、今、委員のように学校の校長先生と信頼関係のある運営委員の方が子ども食堂にも関わってくださっていて、そのことを校長先生にお話をしてくださったら、いいですよ、あなたが言うならとス

ムーズに、また校長先生もオープンだという、校長先生にもよるんですが——といった経緯があるように、間に学校の信頼のある方がいらっしゃると、やりたいものも実現しやすいです。

学校もやはり安心安全を守りたいので、提案されてもすぐには受け入れられないというか、何を基準に精査していったらいいのかといったときに、やはり地域の学校と関係をずっと持っている方はすごく重要だなと思いました。他でもやりたいという方がいて、直接校長先生にお話に行ってもなかなか通らないことも、そういう方を通すとという話もあるので、そういった方がキーパーソンになるということはあると思います。

○議長 校長先生のリーダーシップは非常にパワフルです。私も大変お世話になっていて、尾山台中の校長先生も、部室として貸すからどんどん使ってみたいな感じだし、ゼミを小學校でやらせてもらえるんだったら打合せに行けますよみたいなことを言ったら、全然使ってみたいな感じで、ランチルームとかで学生がゼミをさせてもらったり、ほかのスタッフの方も受け入れてくださって、本当に勉強させていただいています。だからといって何でもかんでも校長先生に電話して使わせてくださいと言っても、大体断られると思うので。そこら辺は校長先生としてはどうなんですか。

○委員 今のお話とはずれてしまうかもしれないんですけども、この資料などを見ても思ったんですが、連携という言葉に結構引っかかりがあって、本当に申し訳ないなという思いが強いというか、よく連携、連携と言われていて、果たしてそれらが連携と呼べるのかどうか。ここの資料の現状にもあるんですけども、比較的學校が地域とかに支えていただく、お力添えいただくことはすごくいっぱいいろんな學校であると思うんです。例えば、まち探検の訪問先として協力していただくとか、あるいはどこかに出かけるときに引率に加わっていただくとか、いろいろ助けていただいている。では、學校側に何ができるかという、施設をお貸しするぐらいになってしまう。

連携という言葉をしっかり考えてどういう関係性を保てたらいいのかという、やっぱり學校と地域がウィン・ウィンの関係になっていないと、それは連携とは言えないんじゃないかなという気がしています。そう考えたときに、「おやまちプロジェクト」のように、例えば、學校があつて、商店街があつて、大學があつて、大學も研究の一環としてそこに関わっていけるし、実地研究みたいなものができる。學校としても、商店街とか研究する大學から支えていただける。學校が関わっていくことによって商店街も活性化していくという、それぞれに取り分があるという言い方はすごく変ですけども、よっしゃ、ラッ

キーという部分が生まれると思うんですが、なかなかそこまで行っているところは多くないのかなと。

地域の環境とかもあると思うんですけれども、先ほどからお話に出ているように、商店街のようなものがあつたりすると比較的そういう関係性はつくりやすいのかなと思うんですけれども、うちなんかもそうですし、世田谷の学校は結構多いんじゃないかなと思うんですけれども、どっぷり住宅街というところはなかなか難しいので、また違う形を考えていかなければいけないかなと感じています。

○議長 本当にそうですよね。3者関係以上になるとビジネスモデルじゃないですけども、ステークホルダーマップじゃないですけども、それぞれが持っている資源とニーズがうまく交換されて、単一の団体だとできないことが起こるみたいな。多分うまくいっているところは、分析するとそういう風にそれぞれが提供しているものと得ているものがあるみたいなことで成り立っているんです。

○委員 では、学校が果たして何を提供できるかという、すごく抽象的な言い方ですけども、子どもの姿を見て地域とかに喜んでいただくとか、あるいは子どもたちが行くことによって何かそこが活性化されて、そこに人の流入があるということしかできないのかな、なかなか難しいなと。だから、今日こういう場で、学校としては例えばこんなことが地域に対してできるんじゃないかということをおぼせていただけたら、ありがたいなと思っています。

○副議長 場所の提供は非常に重要です。地域資源として学校は各小学校区に必ずあるので、先ほども人、物、金とおっしゃいましたけれども、物理的な空間として学校は非常に貴重な資源ですので、それだけでも地域コミュニティの中で学校が果たす役割はかなり大きいのかなと思うんです。ただ、先生方は忙しいので、人を出すのはなかなかできませんから、共通なのは学校にも家庭にも地域にも子どもがいるということだけです。それで逆にお伺いしたいのは、学校側から見て、これはウィン・ウィンだな、これはよかったなと、地域との連携とか地域との関係でのどういう場面でそれを感じるかです。さっきの職場体験を受け入れてくれるとか、まち探検を受け入れてくれる以外に何かありますか。

○委員 こちら側が享受できるものはすごくいろいろ思いつくんですけども、逆にこちらがやっていることで相手がウィンと思ってくれるようなことが果たしてどれぐらいあるんだろうというのがすごく思うところなんです。

○委員 私もいろんなイベントを主催してきたけれども、やっぱり最大の魅力は学校のグ

ラウンドと体育館です。それをただで借りられるのが最大の魅力だから、それで十分だと思うんです。そこで学校に人が集まるんです。だから、校長に電話して貸し渋る校長はやっぱり人気がないです。どんどんやってくれという校長が地域では人気がある。

○委員 あともう一つは、災害のときの避難所になることです。これはかなり地域にとっては大きいと思います。

○議長 そのスペースがあるかないか。みっちり住宅地だったら、いざとなったときに何もできませんけれども、そこに学校というスペースがあるだけでまちのいろんな、災害時もそうだし、要はみんなが集まるコミュニティーの場としてもそこは有益なわけですから、地域に学校があって、人が出入りしたり、何かのときに助かるみたいなのはすごいことですと、ちゃんと言ったほうがいいかもしれないです。

○委員 もう一つ言うと、防災訓練などを中学校の施設を借りてうちはやっているんですけれども、中学生が地元にいる力になると。実際何か起きたときには、小学生は避難させるほうですけれども、中学生は避難してきた人に物資を配ったりだとか、いろんな力仕事だったりも実際役に立つ人材であると捉えて、中学生と一緒に災害の訓練をしています。

○副議長 各学校に避難所運営委員会がありますよね。その中の防災教育で避難所運営訓練に中学生も参加していると。

○委員 うちの息子が行っていた中学校も中学1年生が必ず防災訓練の日は全員出て、それぞれの役割に分かれてという体験をしつつ、地域の方と一緒に避難所運営をするという、要は高校生はそれぞれ違う場所に高校がありますので、地元というと区立中学校になります。

もう一つ今思いついたのが、うちの給田町会は、給田小学校と烏山小学校と毎年交互に1丁目から5丁目までの町会の運動会をずっと続けているんです。商店街はないけれども、町会とのつながりということではこういうのが行われていくことはできるんじゃないかなと思いました。キーパーソンになる人というのと、町会と小学校というとなかなか難しいとは思いますが、そこで育っている子どもたち、親たち、そういう人たちと年に1回ですけれども、交互に小学校の校庭をお借りして、前は国士館の柔道部の合宿所が近くにありましたので、必ず柔道部の方がお手伝いに来てくださったりしていました。そういうこともできるかなと思いました。

○委員 いろんな立地条件が違いますので、できることとできないことがあると思うんです。私の所は、祖師谷という所なんですけど、ウルトラマン商店街が隣接しております。あ

と近くですと、中学校があるんですが。青少年委員をしていたときに、近隣の学校もそうですけれども、6ブロックというところで学校でお祭りがあったんです。ところが、祖師谷の場合、それがなくて、ある校長先生がいらしてから、うちの学校でお祭りをできないかお話がありまして、それが年度が始まってすぐだったものですから、PTAの方が最初の総会等であたふたしているところで大変だろうということで、結局、当時青少年委員だった私が一応、長みたいな形になって、では、やりましょうと。校長先生が声をかけてくださった場所は学校協議会だったんですけれども、学校協議会は行政の方も町会長も商店街の方もいらっしゃる。そういう中でお祭りをその年は1か月くらいで準備してとりあえずやったんです。

それをやった後に、ただお祭りをやるだけより、子どものことや地域のことを考えると見守ることも必要だし、ちゃんとした会を設けてそれで活動していったほうがいいんじゃないかということになって、会を立ち上げたんです。資金がないので、行政の、絆という助成金を申請しまして、それを使って見守り運動、祭り、地域清掃に協力をするとか、いろんな活動をするようになったんです。それからもう10何年経っているんですけれども、そのお祭りをまずやりましょうと言ったときも、青少年委員であったということが、委嘱を受けて学校に出入りをしていますから、学校の先生方と学校についてはいろいろ分かっている。

それから、地域というところでもたまたま周年行事などを行った関係で、地域の方と繋がりがあったものですから、声をかけて太鼓や踊りをやっていただくとか、いろんな活動団体の方にも協力していただいて、活動資金をそこで一緒につくっていただく代わりに協力していただくという形にしました。普通ですと、例えばボロ市というお金を払ってそこにお店を開いて、そこで収入を得てという形ですけれども、我々は助成金があるので、とにかく儲からなくてもいい、子どもたちのためと地域と繋がればいいということで、様々な地域の方が入ってくださった。あと、児童館とかBOPの方もそうですし、消防団が警備に加わってくださったりとか、いろんな関係の方も来ていただいて、もちろん自治会の活動をしていらっしゃる方々も入っていただきました。

まち自体も、阪神・淡路大震災までは商店街と住民はちょっと壁があったんです。ところが、大災害を教訓に、連合会長さんがそういう壁は取っ払ってまち全体で協力しないといけないということで町全体のお祭りを始めて、祖師谷ふるさとフェスティバルをやるようになって、それももう20何年やってきているんです。そういう中で、学校は学校で子ど

もたちが発表する場であったり、逆に商店街も学校の子もたちと一緒に街路灯の旗を作ったりとか、防災訓練や何かのときには卒業した中学生も小学校まで来てとか、中学校のそばに都立高校があるんですが、そこが奉仕授業の一環で地域のどこかで協力をしたいということで、お祭りとかに協力してくれる。そういう交流ができるようになって、それまでは商店街、住民、学校、それからいろんな施設それぞれがそれぞれの活動をしていたんですけれども、まちが一体になることによって毎年必ず顔を合わすということから、非常に交流ができるようになりました。

そういう意味で、まちとしては商店街もありましたし、そういう交流のきっかけができるということもあったので、資源的には大変よかったのではないかと思います。ただ、住宅街だけで学校がおありになるところもあるし、状況に合わせて全体的には考えていかなきゃいけないのかなと思います。

○議長 ありがとうございます。極めていろんな方々がいろんな活動に協力し合っているということで、私は知識が全然なくて存じ上げないですけれども、大学協議会がハブになっていて地域と学校が繋がるみたいなことが起こっている最近の状況は何かありますか。あそこの協議会は結構活発だねとか。

○副議長 学校協議会ですか。

○議長 よく大学と地域の連携とかで協議会があって、校長先生を支えて、市民が参加してみたいな図は描いてあったりするけれども、全くあれが機能するように思えないみたいな、何となく会議をやれば何かが起こるみたいなイメージがあるんですけれども、多分違うんじゃないかなという気もするんです。そういうところで何かダイナミックな動きが起こる場合と、本当にそういう名簿ができて終わってしまうに近いようなこと、その辺も、委員の話を聞いていて、要はプロジェクトごとということだけじゃなくて、そういう学校を支える現状の組織の中でも元気なところとそうでもないところはあるかなという、そこも何かヒントがあるのかなと思いました。

○副議長 ただ、組織としては重要です。世田谷区で言うと学校運営委員会ですか。世田谷はすごいです。本当に全ての学校に学校運営委員会を置かれているというのはなかなかない特徴で、もちろん学校運営委員会は学校運営を改善するとかそっちのベクトルですけれども、ただ、そこをきっかけに地域の活動のために学校を使わせてもらえるようになるとか、そういう媒介としては非常に重要な組織なのかなと思うんです。先ほど言われたように、ずっと地域に住んでいる方が学校運営委員になっていて、校長先生と懇意にしてい

る中で使わせてもらえませんかと言うほうがやはりいいです。そういう意味では、世田谷区は地域活動のアドバンテージはかなりあるのかもしれないです。ほかはなかなかないです。

○委員 学校支援コーディネーターという人たちもいまして、それから青少年委員ももちろんいますし、そういう意味では、世田谷区は割と学校と地域が交流するきっかけを作れる方の存在はあると思います。

○副議長 素地はありますよね。東京都内でこれだけコミュニティースクールをやっているのは世田谷と三鷹ぐらいです。ほかは数校しかないとか、世田谷はそこがすごいです。

○委員 渋谷区、品川区、目黒区、世田谷区、それから大田区の5地域でしたか、城南地区でいろいろそういう交流があって、青少年委員は、今は現役の方々はそこは関わっていらっしやらないと思うんですけれども、私どもの頃はまだ城南地区に世田谷区の青少年委員も出ていきまして、5地区の青少年委員たちが交流する場があったんです。世田谷区は各小学校に1人青少年委員がいますけれども、ほかの区はそうではなくて、今のスポーツ推進委員のように地域に青少年委員がいるという形で、学校と直ではない状況であったという時代があります。

それで、よく質問を受けたのが、どうやったら学校といろいろ連携とか協力ができるような活動ができるんでしょうかということ、世田谷区はそれが当たり前だったのですけれども、そのようなことがありました。でも、今は連携ももう少し考えていかなきゃいけない時期に来ているのかと思いますし、地域は地域で住民は高齢化しておりまして、人材不足という状況にありますから、コミュニティーをどうやって維持していくかという問題を抱えております。それから、まちで子どもたちが育っていくので、その子どもさんたちが育ったまちが自分たちのふるさととして大事にしていけるようなまちということになると、やっぱり協働してやっていかなければいけないわけですが、とても大きな課題を抱えた状態ではいるんです。ですから、何か考えていかなければいけないという意味では、非常にいろいろヒントをいただけるのかなと思っております。

○委員 この場は多分結論を出す場じゃないので、アトランダムな意見でいいと思うんですけれども、学校と地域の連携という意味では世田谷はもともと進んでいるんです。もう10何年前から学校協議会というのが始まって、今は地域運営学校ですので、コミュニティースクールです。また、令和3年度までに全校導入で学校支援地域本部という活動が始まると。行政的な意味では非常に進んでいるところなんです。ただ、上からと言ったら失礼

かもしれませんがけれども、上からの施策ではなくて下から盛り上がるという意味での連携の仕組みはまだ確立されていないのが実情じゃないかなと。その中で今、「おやまちプロジェクト」とか、あるいは総合型地域スポーツクラブとか、ぼつぼつと出てきてはいる。それをどういうふうにしてまとまった形でやるかというのが、我々のこれからのこの会の課題かなと、私なりに捉えているんです。

もう一つ、頭の中に入れておかなきゃいけないのは、世田谷の一つの大きな特徴として、学び舎というシステムがあるということです。これは世田谷だけだと思うんですが、いわゆる地域の小中学校では2校ないし3校でしょうか、1つのまとまった形の学び舎というシステムがあるということはやっぱりかなり大きなエレメントとして考えていかないといけないかな。つまり、商店街と1校という考え方じゃなくて、地域全体の学び舎という1つのコンセプトはやっぱり大きな柱として捉えておかなきゃいけないんじゃないかなと思いました。

○議長 確かに制度的に整っていても、下からというか、内発的なのというか、自動的にいろんなものがどんどん生み出されていくようなダイナミックな状態になるかどうかというのがまた次のステップなんだと思うんです。ずっと同じメンバーで同じことを考えていてもいけなくて、それがあってによってそれまで繋がっていなかった人が繋がるとか、毎回新しい人と出会うとか、生き物みたいになっていくかどうかみたいなのが、今回の会で重要なポイントの一つなんじゃないかと思います。ありがとうございます。

○委員 今回のこの地域というものをどういう風に捉まえるのかなと。地域というところでも子ども、今だと学校ということを中心にする、学校に行っている子どもとそこに関わっている人、もしくは商店街ということになったり、あとは大学があったりということなんですけれども、それ以外にも一人暮らしの人とか、会社勤めの人とかがいて、全くそういうところに関わっていない人たち、子どももいない、家族もそこにはいないという人たちも含めて地域住民と考えたときに、そこに対するアプローチもあつたらいいのかな。さっきの「おやまちプロジェクト」は夜にバーがあつたりとか、ちょっと教育とは離れているけれども、そういった意味でそこに係らない人たち、もしくはお父さんたちは夜にバーがあつたらまた行くもしれないしというところの角度もあるといいのかなと思いました。話がずれてしまいましたが。

○議長 でも、大事な視点です。「おやまちプロジェクト」でも、単身者は多いんです。高野さんが単身で尾山台に住んでいる人と、ずっと商店街でお店をやって毎年何回もイベ

ントをやっているんだけど、誰一人友達ができないと言っていたのが、「おやまちプロジェクト」を始めたら、どんどん知り合いが増えて、バーに遊びに来た人が子ども食堂をやりたいと思っている人と出会って子ども食堂を一緒に手伝うということがやっぱり起るんです。どうしても教育というと、すぐに教育に関わってくださいみたいになるんですけども、何か別の繋がりができることによって、結果的にその人が地域の教育につながるアクションに参加するみたいなことは、実は結構あり得るんじゃないかと思います。

○委員 学校と地域ということなので、本当に「おやまちプロジェクト」とかのモデルを参考にしながら私たちも学ばせていただいて、例えば、うちの学校は全然商店街もないし、そんなのできないよねとなっちゃうんじゃないかと、それぞれの学校、地域においてコミュニティーが作れるよと、いろんなパターンを提案する。私も前期のときに社会教育委員は一体何をやっているのと、知らない人もたくさんいる。地域の人に言っても全く知らない、聞いたことがない、名前だけは知っている、そういうことが大変多かったです。それで、最後に提案があって、関係者の人にはちゃんとこの会のやっていることを伝えましょうというところで終わったと思うんです。

今回、まさに各学校とか地域へ、「社会教育委員の会議でこういうことを今考えています、こういうことができるんじゃないんですか」と最終的にお伝えできて、その先はそれぞれの学校とか学校運営委員会であったり、商店街とチームを組みましようだったり、もっと小さいけれども、例えば、おやじの会、ファザーズが今だったら、うちの学校は学校運営委員会が主催で、ふだんはサマースクールなんですけれども、今年はオータムスクールで、オンラインでおやじの会が関わってくれたりとか、遊び場開放運営委員がお祭りをやるとか、それぞれの学校も全て地域と連携したような活動はしています。それをみんなが認識できるような形で、社会教育委員はせっかくこういう会議を持っていて、具体的にこういうことを1期2年の間にやったんだねというのが分かってほしいなと前回すごく思ったので、でも、今年のこの取り組みは各校に落としていけるものなので、すごくいいなと思っています。

○議長 ありがとうございます。確かにここで議論したことをどう実社会につなげるかは大きな課題だと思うので、何か冊子にまとめてできましたと言ってもなかなか読まないです。2年前、ワークショップみたいなのをやったこともありました。七、八十人の方に集まってもらっていろいろ議論する場所がありましたけれども、例えば、我々で学校連携ポイント、要素を抽出してみて、こんな感じが大事なんですよみたいなことをお披露目しつ

つ、皆さんの意見をもらったり、あるいはそれぞれの地域や学校でどんなことができそうか考えてもらうみたいな、単に冊子としての成果物だけじゃないアウトプットもあり得ると思うんです。その辺についても何回か、年度内に来年どんなふうに進めていくかみたいな議論もさせていただければと思います。ありがとうございます。

○委員 中学校の校長としては、なかなかいづら場所だなと。中学生というのを期待されているんだろうとは思いますが、世田谷区の中学校は激しい学校選択に今さらされています。こういう取り組みが生徒数増につながればというのは正直思います。

反面、やっぱり悩ましいのは、中学生は3年間ですので、3年生を動員することはなかなか厳しい。それから部活動がある。そこが小学校との立場の違いだと思うんです。なので、幾つかお話も出ましたけれども、場所を貸すことはできるのかなと思うんですけれども、やはりなかなか難しい部分が中学校は必ずあるのかなと思っています。今、いろいろなお話を伺いながら、中学校として何ができるのかなと。現状、本校でもほぼ夜の開放、土日の開放を含めて完全に地元で貸しています。ですので、そういう意味では貢献しているんだけど、これが新たに始まったときにどの程度できるか。本校は商店街づくりの学校でもありませんので、どんなふうなことができるのかなというのをちょっと学ばせていただけたらと思います。中学校の校長としてはなかなか厳しいんですけれども、できることは御協力したいと思います。以上です。

○議長 ありがとうございます。どちらかという、逆に実際の学校現場の難しさみたいなものも教えていただけると、より現場、現実で即した分析、検討ができるんじゃないかと思います。引き続きよろしく願いいたします。

○委員 今、校長先生がおっしゃっていましたが、中学生が小学校の運動会にボランティアとして参加してくれています。それも十分地域の学校との連携ということで、小学生は中学生のお兄さん、お姉さんが手伝ってくれる姿を見て、自分たちもああいう中学生になりたいとか、そこが学び舎のいいところだなと思っているので、実際に今やっていることで今後も繋げていけるようなことでいいんじゃないかなと思いました。

○議長 ありがとうございます。中学生の力も地域にどんどん発揮してもらえるといいですね。「おやまちプロジェクト」は、今、「おやまち部」という中学生のメンバーがいます。それも校長先生に「おやまち部」というのをやりましょうよと言われて、文化部でも運動部でもなくて、それは帰宅部じゃないんですかみたいな、放課後、まちでいろんなことをやるみたいな、面白いからやりましょうとか言って、ちょっとずつ始めているんです。

まだ成功するかどうか分かりませんが、そんなことも参考になるかなと思いました。

ということで、本当にたくさんの視点をありがとうございました。恐らく今日のお話というのは多分全て、この後もいろんなところを掘って深めていったりする話で、とりあえず最初に出たいろんな視点ということで大事に取っておいて、それをどんどん整理したり、まとめていったりと繋げていきたいと思っています。

お話を伺っていて、次回はフィールドワークというか、「おやまちプロジェクト」はどんなものかみたいなことを少しみんなに教えてもらいに行くということをやしつつ、恐らくほかの事例も少し見ながら、何か連携のポイントはありそうです。話を聞いていると結構ある。10とか20の大きな項目でそれぞれ細かくありそうなので、そういうのをまずは集めていって整理していくような作業に入っていくのかなと思いました。今日の議論はその一部として、我々の財産としてまとめていきたいと思っています。何となくそんな進め方をイメージしております。

時間の残りも少なくなってきたので、次回の日程ですが、11月中くらいをめどに行けるといいのではという事務局からの御提案なんですけれども、できれば今、日程の候補日を決めたいと。

○事務局 フィールドワークということで、当然皆さんの日程もそうなんですけど、相手先、「おやまちプロジェクト」の代表の高野さんが一番いいかと思うんですが、高野さんとも連絡を取ってみて、御都合の合う日という形になります。今日は、皆さんの御都合を二、三、候補としていただくと、事務局で高野さんに連絡をさせていただきます。

○議長 少し情報提供をすると、水曜日の夕方だと、大体学生が何かしているので、大学生が何かしていて、そこに子どもが来ているという様子を見学していただきつつ説明、レクチャーなどもできるという感じで、お勧めとしては水曜日の夕方がいいのではと思います。

(日程調整)

○議長 もし調整できないようでしたら、また個別に日程調整させていただくということで、18日か25日を候補にさせていただきます。

ほかに何か各委員の皆様からありますか。議事はそれで大丈夫ですよ。

なければ、事務局の方からお願いいたします。

○事務局 本日は特段ございません。参考資料のうち、後ろの3つぐらいは薄いので、ぜひお持ち帰りいただくと助かります。物としては、青少年委員のリーフレット、とうき

よりの地域教育、講演と映画のつどいです。この辺はお持ち帰りいただいて御一読いただくと幸いです。

以上でございます。

○議長 ありがとうございます。

なければ、以上で閉会とさせていただきます。皆さん、今日はありがとうございました。今後どうぞよろしく願いいたします。